

障がいに理解のある社会に

市立守山中学校一年 奥野 寿

私の父は足が不自由です。私が小学一年生の頃、病氣でたおれ、足がまひしてしまいました。このいっけんから、父は杖を使つたり車いすを使つたりして生活をするようになりました。このような生活を身近で見て閑わってきた私の思いはいくつかあります。

一つ目は、ヘルプマークの存在を知つてほしいということです。この言葉をどこかで聞いたことがあるという人もいるかもしれません。ヘルプマークとは、外見からは分かりにくい援助や配慮が必要としている方々が、周囲の方に支援を必要としていることを知らせるマークのことです。私の父もつけていて、私は元々このマークの存在を知っていました。なので街中や電車でこのマークをつけている方を見かけた時は、「どこか体が不自由だったり、病氣を持つている人だろうな」と思つていましたが、みんながみんな知つているわけではありません。そのため、良くない目で見られたり、障害がある人を避けたりされてしまうことがあります。なので、街中などで十字架とハートの形が描かれた赤色のマークをつけている方を見かけた時には心や体の病氣を持っている方なんだなど、少しでも理解してほしいです。

二つ目は、障害に理解のある人になつてほしいということです。

先ほど説明したように皆さん周りには、外見からは分かりにくいうまく見えても、実は毎日の生活でいろいろ苦ろうをしています。だからこそ、私たち一人ひとりが「もしかしたら困つているのかな」と気付こうとする気持ちを持つてみることが大切です。ほんの少しの優しさや気づかいが、その人にとつて大きな助けになることもあります。たとえば、電車で席をゆずつたり、重そうな荷物を持つている人に声をかけたりするだけでも、その人の一日がとても過ごしやすくなるかもしれません。ヘルプマークをつけている人を見かけたら、「何か必要なことはありませんか」と勇気を出して声をかけるのもいいと思います。

このように、みんなが少しずつ思いやりを持てば、障害がある人でも、安心して過ごせる社会になるはずです。